展覧会趣旨

今まで見たこともない色彩を纏った“七宝”に魅了され、その技の獲得に邁進した人たちが、幕末から明治期の日本にいました。彼らは、19 世紀の万国博覧会を通じて、瞬く間に日本の七宝を世界から着目される存在としました。並河靖之[1845･弘化２年～1927･昭和２年]もその一人で、1873(明治 6)年から七宝業を手掛け、1878(明治 11)年に専業とし、紆余曲折を経ながら「並河七宝工場」を営み、この地で職工たちと世界に冠たる“Y.NAMIKAWA,FINE CLOISONNE WARE”を創出しました。

「並河七宝」が究めた有線七宝技法(以下、有線技法)は、金属の器胎を素地とし、施す図柄の輪郭線(アウトライン)を細い金属線で模り、その中にガラス質の多彩な七宝釉薬を挿し、焼成、研磨して創り出されます。光彩ある精美な七宝には高雅な雰囲気が漂い、地色を黒色にすると、一層、見る人の心を魅了しました。

国内の七宝技法は、近世初期に創始する幕府お抱えの七宝師･平田道仁[1591･天正19 年～1646･正保 3 年]を祖とする一族が相伝し、市井に普及しませんでした。しかし、幕末の尾張藩で梶常吉[1803･享和 3 年～1883･明治 16 年]が、独学で技法を開発した尾張七宝が興隆し、庶民による七宝業が胎動しました。将来性ある新興産業と注目され、明治維新後の京都や東京、神奈川、山梨、埼玉など、各地で近代七宝業が着手されました。

そもそも、並河家も靖之も商いやものづくりに縁はなく、並河家は門跡寺院青蓮院の坊官の家柄で、靖之は 1855(安政 2)年、数え 11 歳で養子となりました。養父･靖全の急逝により家督を継ぎ、天台座主･青蓮院宮入道尊融親王[1824･文政７年～1891･明治 24 年、後の久邇宮朝彦親王]に仕えました。靖之の生家は武家の高岡家(近江栗太郡六地蔵梅野木)で、実父･九郎左衛門は武州川越城主松平大和守家臣･川越藩京都留守居役を勤めました。明治維新後、靖之は宮家に復籍した朝彦親王の家従となるも、先行きへの不安は絶えず、奉職の傍ら七宝業に着手し、やがて希代の七宝家として名を馳せました。

明治時代に日本を訪れたエリザ･ルーアマー･シドモアの著書『シドモア日本紀行(明治の人力車ツアー)』(外崎克久訳 講談社 2003 年)には、「第29章　黄金の日々」にて〈七宝焼のナミカワ〉〈ナミカワの芸術〉があり、明治20年代前半の並河七宝の様子が伝わります。

靖之の娘(養女)･徳子は、手記『父を語る』(私家版)で、「此頃が父の生涯に於ける黄金時代とも申す可き得意の頂上であったと思われます(つまり明治三十年前後時代)」と、国内外の博覧会で名声を博し、緑綬褒章や帝室技芸員など栄誉を重ねた当時を述べています。

今展タイトル副題の“黄金の時”には、靖之と並河七宝、そして近代七宝の産業と文化が開化した、明治時代に最盛期を重ねています。

七宝は暗闇の中に在っても、わずかな光をその身に受けて、自ら光を放ち、たちまち辺りを明るく耀かせます。本日のご来館の皆様は、日本の七宝文化の発展に光をそそいで下さる存在です。お力添えに心より感謝申し上げますとともに、移り行くひと時を、心穏やかに、当館にてお過ごしいただければ幸いです。

並河靖之七宝記念館